

配偶子提供のテリングに関する検討 —大学生を対象として—

Qualitative research on telling of gamete donation : Using data from university students.

佐々木直美（山口県立大学看護栄養学部看護学科）

Department of Nursing and Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

Key words : Infertility, telling, sperm donation, egg donation, gamete donation

キーワード : 不妊、テリング、精子提供、卵子提供、配偶子提供

要旨

本研究は、配偶子提供を受けて生まれた子どもに対して、親が出自を伝えるか否かの意思決定に関連する心理的要因について大学生を対象として調査したものである。データは自由記述によって収集し、内容分析を行った。その結果、積極的に伝えようとする理由には、「真実を子どもが知ることによる親子関係の崩れに対する懸念」があり、伝えるつもりがない、あるいは子どもが知りたいと願った場合にのみ伝えるという人々は、「真実を知りたいという子ども自身の意思にゆだねたい思い」があった。本結果と先行研究から、子どもへのテリングに関して親が先送りしたい、あるいはためらいがあるかもしれないことを支援者は理解しておくことが必要である。また、提供を考える段階から子育ての全期にわたって、支援者が受容的な態度で、ニーズに応じた相談をいつでも受けられるようなシステムを作ることが望まれる。

In the present study, it was surveyed of psychological factors related to the decision making whether children who conceived by gamete donation should be told about their offspring, using data from university students. Data was collected by free descriptions, and analyzed by the content analysis. As a result, Reasons for intending to disclose positively included concerns about the harmful effects of family secrets, and to avoid disclosure from someone else. On the other hand, among those who did not have will disclosing or did disclose only when the child wanted to know, common factor was thought to be a desire according to the child's own intention of knowing the truth.

From this results and previous study, these demonstrated the need to understand for supporters that parents might want to put off or hesitant about telling their children. Over the duration of parenting from stage to consider gamete donation, it is desirable to have system to provide support such as the consultation, in accordance with the needs at any time with receptive attitude.

【問題と目的】

本研究は、精子や卵子の提供を受けて生まれてきた子どもに対して出自を伝えるか否かの決定要因について検討したものである。先の研究として、佐々木¹⁾は大学生を対象として、精子・卵子提供を受けるかどうかの意思決定に至る心理的要因を調査した。その結果、「提供を受ける」意志を持っている場合に

は、子供を愛し育てる自信を有していた。一方で、子どもが事実を知り苦しみ悩む可能性に対して親としてどう対応していけるかといった繊細な側面には目を向けにくいことが示された。このことから子どもが出自に関して悩む可能性は、子育て期間中続くものであり、夫婦が子どもの成長とともに課題を感じたときに支援者が相談にのれるように細く長くつ

ながっておくことの重要性を論じた。それを受けて、本研究では配偶子提供を考える夫婦のテリングに関する検討を行った。Telling（以下、テリング）とは、子どもの小さい頃からその出生にまつわる真実を親が子どもに話すことである²⁾。例えば養子や特別養子は実親の戸籍を調査することが出来るため、子どもが親の住所を知ることが出来るが、AID（非配偶者間人工授精）によって生まれてきた子どもは戸籍には夫の実子となっており生物学的な父を知りたいと思っても困難である³⁾。またAIDによって生まれた子どもに対して提供者のプライバシー保護および提供者数の確保の観点から提供者の情報開示は行っていない⁴⁾。一方、JISART（日本生殖補助医療標準化機関）はそのガイドラインにおいて、「被提供者の夫婦が、生まれた子への開示による影響等も考慮し、実施医療施設のカウンセリングも受けつつ、幼少時（小学校入学前が望ましい）より、非配偶者間体外受精により生まれた子である旨を子に告知しなければならない」と記載している⁵⁾ように、親から子へのテリングは推奨されている。またテリング推奨の理由として、久慈ら⁶⁾は、テリングしないことは、親が大事なことを隠していたという子どもにとっての背信行為であり、子どもは父親と思っていた男性との遺伝的つながりがないという重大な事実と直面し、これまでの家族としてのつながりのすべてが崩壊してしまうような感覚に陥ることや、親子関係に大きなダメージを受けることの問題を挙げている。しかしながらその一方、伊藤⁷⁾は、配偶子提供を考えている夫婦の事例から、「テリングせずに愛情を持って育てれば大丈夫」との楽観的な捉え方や、「自分の子と思いたいからテリングはしない」といった拒否や迷い、抵抗感などが見られたことを指摘している。

子どもを望む夫婦にとってまず目標は妊娠、出産することであるため、妊娠する前にテリングについて支援者から伝えられても、どこか自分のこととして感じられなさや、「そんなことより妊娠が先」といった気持ちになるのかもしれない。しかし、提供を受けて妊娠、出産すれば、いずれテリングという課題は夫婦の目の前に立ち現れる。夫婦からすれば課題に直面して初めてテリングの重さに気づき、焦り迷い、支援者に対して「なぜあの時もう少し情報を教えてくれなかったのか」と感じるかもしれない。

このような現状に関して、本研究では卵子提供の

現状、テリングの重要性や提供で生まれてきた子どもの気持ちについて知る機会があることがテリングにどう影響するかを考え、テリングを行うこと、行わないことの意味決定につながる心理要因について検討を行う。なお今回は調査対象者が大学生であるため、実際に不妊に悩み提供を考えている夫婦の気持ちそのものを捉えているとはいえない。しかし心理支援者や看護師などが、テリングの問題を扱う際に、どのような課題や配慮が必要か知っておくことは、提供を希望する夫婦の支援に役立てることが出来るのではないかと考える。

【方法】

調査対象者：不妊に関する講義をこれまで受けた経験のない大学生 85 名

手続き：不妊に関する講義の後に 1 回目の質問紙調査を実施し、卵子・精子提供などに関する講義の後に 2 回目の質問紙調査を実施し、その 1 週間後に 3 回目の質問紙調査を実施した。

1 回目の講義と質問紙への回答（以下 1 回目調査）：不妊の定義、原因、不妊治療の方法、治療による負担感、子どもを望む気持ちについて 90 分間講義を行った後、早発閉経により卵子提供を望む夫婦の事例と、何度も ART（生殖補助医療）を繰り返しても子どもが授からない高齢夫婦の事例を読み聞かせた。その後、質問紙において、「あなたがこの夫婦だったら、配偶子提供を受けて生まれてきたことを子どもに伝えることについてどうしますか」という問いを行い、「夫婦で相談して、子どもには積極的に伝える」、「夫婦で相談して、子どもから尋ねられたら伝える。尋ねられるまでは伝えない」、「夫婦で相談して、子どもから尋ねられても伝えない」から 1 つ選択させた。次いでそれを選んだ理由について自由記述で質問紙に回答させた。

2 回目の講義と質問紙への回答（以下 2 回目調査）：1 回目調査の 1 週間後に、AID、卵子提供の現状、知る権利、テリングの重要性について 90 分間講義を行った後、AID によって生まれた子どもが自分の出生について親から隠されていたことに対して不安や怒りを感じているという内容の 2 つの事例を読み聞かせた。その後、1 回目調査と同様の質問紙に回答させた。次いで、1 回目の調査時に話した、早発閉経により卵子提供を望む夫

婦の事例と、何度もART（生殖補助医療）を繰り返しても子どもが授からない高齢夫婦の事例に再び触れ、「あなたがこの夫婦だったら、配偶子提供を受けて生まれてきたことを子どもに伝えることについてどうしますか」について1週間よく考えてくるように指示した。

3 回目の質問紙への回答：2回目調査の1週間後において、1、2回目調査と同様の質問紙に回答させた。また講義を理解した上で質問紙に回答しているかを確認するため、講義で扱った内容に関する10項目の確認テストを実施した。本研究の調査協力者は、8割以上正解していた。

倫理的配慮：調査協力者への説明は十分行い、同意を得た者を対象に実施した。また山口県立大学生命倫理委員会の審査を受けて行った。

分析方法：まず1回目調査について、テリングの意思決定に関する回答において「子どもには積極的に伝える（以下、積極的に伝える）」、「子どもから尋ねられたら伝えるが、尋ねられるまでは伝えない（以下、尋ねられたら伝える）」、「子どもから尋ねられても伝えない（以下、伝えない）」の回答にそって調査用紙を分類した。その後、「積極的に伝える」と回答した者の自由記述について内容分析⁸⁾を行った。すなわち質問紙内の自由記述内容を素データとし、1文章を1単位、1コードとした。次に類似した意味内容の要素を集めて、それらを表す表現に書き換えてサブカテゴリー（以下【 】）とした。そしてサブカテゴリーも同様に類似の意味内容を集約してカテゴリー（以下【 】）とした。分析過程においては常にコードを読み直し意味内容の分類が適切であるかを確認し、さらに質的研究を行う研究者にデータ分析・結果のチェックを依頼し信用性を高めた。この作業を「尋ねられたら伝える」、「伝えない」の選択においても同様に行い、さらに2回目、3回目調査も同じ手続きをとった。なお自由記述をコードで分けると1つの自由記述から1から複数のコードが得られた。

【結果および考察】

1. 「積極的に伝える」、「尋ねられたら伝える」、「伝えない」を選択した人数について

1～3回目調査において「伝える」、「尋ねられたら伝える」、「伝えない」の意思決定の人数を表1に

表1 テリングの意思決定数（N = 85）

| 調査回数 | 伝える | 尋ねられたら伝える | 伝えない | その他 |
|------|-----|-----------|------|-----|
| 1回目 | 56 | 24 | 5 | 0 |
| 2回目 | 54 | 19 | 9 | 3 |
| 3回目 | 56 | 19 | 8 | 2 |

示す。カテゴリーによるデータ数の偏りが大きく、データ数の経時的な変化に関して統計的処理は実施していない。表1から、1回目調査時よりも2回目調査時の方が「伝える」や「尋ねられたら伝える」が減り、「伝えない」や「その他」が増えていたが、これは予測した結果とは異なるものであった。予測としては、2回目の講義で卵子提供の現状、テリングの重要性や提供で生まれてきた子どもの気持ちについて扱ったため、1回目で「尋ねられたら伝える」、「伝えない」を選んだ対象者であっても2回目の講義を聴くことで「伝える」、「尋ねられたら伝える」といった親が子どもに事実を伝える方向に考えが変わるのではないかと考えていた。しかし得られた回答の結果は、予測とは逆に、テリングの重要性や生まれてきた子どもの気持ちを知ることは、「伝える」という方に向かうとは限らず、伝えることの不安感の増大や、隠してしまいたくなる心理を引き起こす可能性もあることが示された。

2. テリングの決意につながる要因について

テリングの決意につながる要因を自由記述からとりまとめたのが表2である。

「伝える」、「尋ねられたら伝える」、「伝えない」の選択のすべてに共通する要因として【**真実を子どもが知ることによる親子関係の崩れに対する懸念**】があった。また、「伝える」や「尋ねられたら伝える」を選ぶ人は【**テリングの時期・内容・方法**】、【**子どもの知る権利**】の重視、【**その親子ならではの親子関係の構築**】などを重視していた。一方、「尋ねられたら伝える」と「伝えない」を選んだ人は【**子どもが真実を知りたいかどうかにゆだねたい思い**】を持っていた。

吉田⁹⁾は、大学生を対象にAIDによって生まれた子どもの立場やAIDによって子どもを産む親の立場を想像させ意識調査を行った結果、子どもに知らせる理由として嘘はいけないという倫理観、近親婚

表2 「伝える」、「尋ねられたら伝える」、「伝えない」の選択に結びつく心理的要因

| カテゴリー | サブカテゴリー | 伝える | | | 尋ねられたら伝える | | | 伝えない | | |
|------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-----|-----|-----|-----------|-----|-----|------|-----|-----|
| | | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 1回目 | 2回目 | 3回目 |
| 真実を子どもが知ることによる親子関係の崩れに対する懸念 | 真実を言わないでいると子どもが真実を知ったときに辛い思いをし、親子関係が崩れる可能性がある（から積極的に伝えたい） ※1 | | | | | | | | | |
| | 親は隠していたつもりはなくても、子どもが真実を知ったときに隠されていた、騙されていた経験になる（から積極的に伝えたい） ※1 | | | | | | | | | |
| | これまでの親子関係や家族関係が変わってしまうことが不安（だから積極的に伝えたい）（だから出来るだけ伝えたくない） ※2 | 19 | 17 | 20 | 10 | 4 | 5 | 2 | 4 | 9 |
| | 真実を子どもが知ることによって子どもが不安になったり混乱する可能性がある（から出来るだけ伝えたくない） ※3 | | | | | | | | | |
| | 伝えると今までの親子関係ではいられなくなる（から出来るだけ伝えたくない） ※3 | | | | | | | | | |
| テリングの時期・内容・方法 | 真実を子どもに伝える時期について ※1 | | | | | | | | | |
| | 真実を子どもに伝えるときの内容について ※1 | | | | | | | | | |
| | 真実を子どもに伝えるときの伝え方について ※1 | 43 | 26 | 27 | 10 | 3 | 3 | - | 1 | 1 |
| | 真実を子どもに伝えるときの親の気持ちについて ※1 | | | | | | | | | |
| | 真実を子どもに伝えた後の親としてのフォローについて ※2 | | | | | | | | | |
| 子どもが血のつながりや外見上のことで悩むことに対する懸念 | そもそも子どもが親に聞いてくるということは、子どもが血のつながりや容姿や性格や何かしらのことで悩んでいる可能性がある | 2 | 1 | - | 4 | 2 | - | - | - | - |
| 親から子どもに真実を話すことの重み | 親の本当の気持ちや経緯は親からしか子どもに話せない | | | | | | | | | |
| | 他者から真実を知ることによって子どもがショックを受ける可能性がある | 22 | 19 | 14 | 2 | - | 4 | - | - | - |
| | 親から子どもに話すほうが良い | | | | | | | | | |
| 「子どもの知る権利」の重視 | 子どもの知る権利を大切に | | | | | | | | | |
| | （聞いてくるということは）子どもが自身に関心が高まったり、本当のことを知る心の準備や覚悟ができていく現われである | 6 | 6 | 4 | 11 | 1 | 1 | - | - | - |
| 子どもが真実を受容していくことに寄り添う親としての態度 | 真実を知ることによる子どもの不安や苦しみは親として繰り返し話をしながら受け止め、子どもがその事実を受け入れて行けるように関わる | 4 | 7 | 6 | 4 | 2 | - | - | - | - |
| 子どもへの愛情ある態度 | 小さい頃から親として愛情ある態度を示す | | | | | | | | | |
| | 自分たち夫婦から愛されて育っていることを子どもに分かって欲しい | 3 | 3 | 4 | - | - | - | - | - | - |
| その親子ならではの親子関係の構築 | （子どもにすべてを伝えて）（子どもには伝えずに）その親子ならではの親子関係を作る ※2 | | | | | | | | | |
| | 血がつながっていない親子として親子関係を作っていくことで本当の関係が築ける ※1 | 2 | 4 | 8 | 6 | 2 | 3 | 2 | - | - |
| | 親は自分たちで、子どもは自分たちの子どもだから（積極的に伝えたい）（わざわざ伝えなくて良い） ※2 | | | | | | | | | |
| 子どものアイデンティティの構築 | 早くに子どもに伝えることで一緒にアイデンティティの構築ができる | 3 | - | 2 | - | - | - | - | - | - |
| 真実を子どもに隠しておくことによる親としての辛さ | 隠しているのは自分、夫婦が辛い | 2 | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - |
| 子どもが真実を知りたいかどうかにゆだねたい思い | 子どもが真実を知りたいかどうかにゆだねる | - | - | - | 13 | 8 | 10 | 2 | 5 | 1 |
| | 知らない方が幸せなこともある | | | | | | | | | |
| ドナー情報が分からないという壁 | ドナー情報が分からないのであれば、真実を伝えても伝えなくても「親に関する情報の分からないさ」という点で子どものつらさは同じ | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| 子どもに真実を伝える際の条件 | 遺伝性の病気があれば伝える | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - |
| 子どもに真実を伝えることよりも他の要因を重視 | 子どもの知りたい理由（病気、アイデンティティなど）は、知って傷ついたり苦しみを覚えることに比べればたいしたことではない | | | | | | | | | |
| | 子どもへの影響は遺伝よりも環境の方が大きい | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | 1 |
| | 真実を告げて子どもが「今まで育ててくれた二人が両親だ」と納得するとは思えない | | | | | | | | | |
| | 夫婦だけの秘密にしておきたい | | | | | | | | | |

※は「伝える」「尋ねられたら伝える」「伝えない」で意見が分かれたものに関して附している。

※1は、「伝える」「尋ねられたら伝える」で挙げられていた

※2は、「伝える」「尋ねられたら伝える」「伝えない」で挙げられていた

※3は、「伝えない」で挙げられていた

の回避、遺伝情報の伝達などがあり、知らせない理由として児や親の精神状態や家族関係の揺らぎへの不安、知った後の児の情緒面での問題であったと報告している。この吉田の研究の知らせない理由は、本研究でも知らせない理由として挙げられていたが、知らせる理由としても挙げられていた。

ジャネット¹⁰⁾は、不妊の心理について、子どもを持ってないことが、かつてないほど子どもを欲しくさせると述べている。また才村²⁾は、特別養子縁組を受けた夫婦に比べて、精子や卵子の提供を受けて子を産んだ夫婦は出生を秘密にすることが多いことを挙げている。その理由として、提供を受けて子を産む場合は妻が妊娠し出産するため、普通の親子と外見上変わらないことがその土壌となり、子を持つことで親の不妊問題が解決したように見え、不妊問題は恥ずかしいので隠したい心理につながり、テリングする動機がなくなるということである。しかし、富谷ら¹¹⁾は、3名の女性が提供を受け、母親になるまでの過程をインタビューした結果、3名とも子どもを授かったことに感謝はしていたが、子どもにテリングしておらず、母親としての自信や揺らぎが、さまざまな場面で発生していたと報告している。その母親としての自信が、子どもが父親に似ていることで支えられている場合、子どもの成長に応じて容姿が変わればその自信が変化する可能性があること、また子どもへの告知をしていない場合、成長した子どもから「似ている、似ていない」の発言も今後発せられる可能性もあり、自信に対して負に影響するさまざまな問題を挙げている。つまり、これらの研究から、不妊を乗り越え挙児を得たからには、テリングはできるだけ意識しないでいたい思いがあると考えられるが、テリングをしないでいることは、今すぐでなくても将来において、テリングや親子関係についてどうしたらいいか悩んだり抱え込むことにつながる可能性を持ち続けるという面もあわせ持っているということである。

3. テリングの時期や内容について

今回は、テリングの時期や内容を直接問うことは行っていないが、「積極的に伝える」、「尋ねられたら伝える」を選択した者において、テリングの時期や内容に関する考えの自由記述が多くみられたため、ここで取り上げる。

表3にみられるように出自に関して親が子どもに

伝える時期については、「提供を受けて生まれたことを話しても子どもが理解できる年齢」、「子どもが生まれたルーツに関心を持ったとき」といった子どもの成長にあわせたものや、「子どものころ」から「成人」まで時期としては幅広く、また「早い時期に」、「ある一定の年齢」、「物心ついてから」といった非常に曖昧なものも多くみられた。このことからテリングをする意思を持っていたとしても「幼少期から伝える」というスタンスとは限らないことが伺えた。その結果として、テリングを先延ばしすることになったり、テリングのきっかけがつかみにくくなる可能性があると考えられた。

表4にみられるように出自に関して親が子どもに伝える内容については、「夫婦の愛を受けて生まれてきた大切な子ども」、「提供を受けてまで欲しかった夫婦の思い」などがあり、夫婦の素直な思いを子どもに伝えたいと考えているようであった。

テリングに関する時期についてはいくつか研究がある。宇都宮¹²⁾はAIDで生まれてきた子ども5名に対してメールを用いた調査から、AIDで生まれたことを親から知らされたときの気持ちとして次のことを挙げている。すなわち「困惑」、「両親がこんなにも大事なことをこれまで当事者に隠してきたことがショック」、「技術を行えばなしの医療機関に対して許せない気持ち」、「驚いた」、「得体の知れないものが身体の中に入っていると思うと気味が悪い」、「家族がすべて嘘だと感じた」、「親への信頼をなくした」などである。そして調査対象であった5名全員が、「告知は必須であること」、「早い時期から知っておきたかった」と述べていることを報告している。

また非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ会員¹³⁾は、話す内容よりも親が大切なことを子どもに伝えてくれているという親の態度が子どもに伝わるのが重要であること、血がつながっていることが親子であるという価値観が出来上がる前に、自分たち親子は血はつながっていないが、それが自分たち家族の形であることを伝えること、告知は一度だけでなく何度も伝えることの重要性を指摘している。さらに、いつ、どうやって伝えたとしても子どもにある程度のショックを与えることは避けられないが、告知をすることで親子の信頼関係は保たれ、子ども自身が自分を肯定しこの技術を受け入れて生きていくことにもつながると述べている。古澤ら¹⁴⁾は、養親になった家族を対象に、子どもに

表3 出自について子どもに伝える時期

| | |
|------------------------------------|----|
| 提供を受けて生まれて来たと話しても子どもが理解できるような年齢 | 17 |
| 早い時期 | 14 |
| ある一定の年齢 | 9 |
| 子どもが生まれたルーツに関心をもったとき | 6 |
| 物心ついたとき | 5 |
| 子どものころから | 5 |
| 成人 | 5 |
| タイミングを見て | 4 |
| 高校卒業したころ | 3 |
| 論理的な考えができるようになった時期 | 2 |
| 言葉が分からないくらい小さいころ | 1 |
| 子どもが気づく前 | 1 |
| 思春期よりも早い時期 | 1 |
| 中学生や高校生など自分の気持ちを自分で処理したり物事が理解できる時期 | 1 |

テリングを行うたびにその内容や子どもの反応、それに関わる育ての親の心理について記録やインタビューを通して、子どもの成長に応じた反応の特徴について検討している。その結果、養親の6割近くが、子どもがごく幼い時期(例えば2ヶ月や1歳4ヶ月など)からテリングを開始しており、3歳以前のテリングでは子どもが内容を理解できるかどうかは別として、伝え続けること、口に出すことそのものに親自身にとってのテリングの意味があると述べている。そして、幼児期から児童期には、テリングが対話の形に移行し、親なりの応答の難しさを感じる場合があることや、青年前期では反抗期や思春期の時期でもあるため、親として子どもとともに悩みを受け止める姿勢が重要であると述べている。またテリングの内容や方法について、才村¹⁵⁾は、育て親とは別に血のつながりがある親が存在することを年齢に応じて分かりやすく話すことが重要であると述べており、養子や提供によって生まれた子どもにも使用できるテリングのための絵本を紹介している。本研究の結果は、テリングに関するこのような先行研究やJISARTのガイドライン(小学校入学以前)に比べると、やや遅い時期を想定している回答が多かった。このことから、テリングの時期として、提供によって生まれてきたという内容を理解できる程度に子どもが発達をしていることが重要視されやすいようであるが、それは話をして伝えるという感覚が源としてあるように思う。すなわち「話をすることで伝えるもの」ではなく「最初からあるもの」として

表4 出自について子どもに伝える内容

| | |
|-----------------------------|----|
| 夫婦の愛を受けて生まれて来た大切な子どもである | 21 |
| 提供を受けてまで子どもが欲しかった夫婦の思い | 6 |
| 血のつながりは半分だが自分たちの子どもである | 2 |
| 血のつながりは半分でもおなかを痛めて生んだ子どもである | 1 |
| このような家族の形もある | 1 |

捉えることができれば、親の側の重圧感や心の負担感も軽くなるのではなかろうか。よって、提供を考える夫婦に対しては早期テリングの重要性を伝え、積極的な情報提供とサポートが必要と考える。

4. テリングの意思決定に寄り添う際の支援者として何が必要か

富谷ら¹¹⁾は、治療の限界に直面したときのために卵子提供に関するパンフレットを治療施設等に設置する必要性や、卵子提供のリスクや告知のメリットなどの情報を提供を受ける前に伝える必要性を述べている。また子どものプライバシー保護を重視するあまり相談する範囲や対象と意図的に狭めてしまう女性側の問題を指摘し、一部の医師やエージェントの情報のみで重大な決定を行うことの危険性についても述べており、卵子提供を考える段階から子育てまでの全期に渡って、卵子提供や家族関係に精通した医師・看護師・カウンセラーなどの専門家の支援の必要性を指摘している。また、非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ会員¹³⁾は、AIDによって生まれてきたことを子どもが受け入れていくために必要なこととして、親の積極的告知とAIDの技術を親自身が肯定すること、一度崩れてしまった自分を再構築するための情報と環境の必要性を述べている。すなわち親がどんな思いでこの技術を選んだのかも含めて一つずつ確認しながら埋めていくことの大切さと、同じ立場で分かりあえる当事者の存在の必要性を挙げている。才村²⁾は、テリングを実行するための必要条件として、(1)不妊であることを受容(不妊をしっかりと嘆くグリーフワークを行い、不妊についてオープンに人に話せる状態にならないと子どもへのテリングの段階に進まない。不妊であることによる自身の負い目を乗り越えることが大切であること)、(2)安定した信頼できる親子関係(子どもが幼少の頃より出生にまつわる真実について親自身が話すことによって、オープンな姿勢が子ども

に伝わる。子どもは親を信頼し、長い期間の育児と共に何度もその真実が語られ親子関係に組み込まれると将来の親子関係が安定したものとなり、自信を持った親を子どもは自らのモデルとして取り入れることができる)を挙げている。

総じて、不妊治療を繰り返しても子どもを得られない傷つきを体験しつつ、提供を受けてやっと得られた子どもゆえにテリングを先送りしたくなる、テリングすることなどまるでないかのように意識から遠ざけたいくなる気持ちが沸いて来るかもしれないが、大事な子どもだからこそ、親としてどう子どもとどういう関係を築いていきたいのかを、専門家や同じ思いを抱えている人々と意見交換しつつ、大きくなるお腹とともに考えることが大切ではなかろうか。

大学生を対象とした今回の結果からは、テリングの重要性や AID によって生まれてきた子どもの情報を親が知ることは、「伝える」意思を持つ方向に作用するとは限らず、テリングをしない方向に変化する可能性も示された。従って、医師・看護師・カウンセラーなどの支援者は、子どもへのテリングに対して親は先送りしたい気持ちや迷いをさまざまな時期に持つかもしれないということを理解しておく必要がある。そして、早期テリングを推奨しつつも、提供を考える段階から子育ての全期に渡って、ニーズに応じて相談にのるなどの支援を提供する体制と、その迷いや揺らぎを受け入れる心構えを持っておくことが望まれる。

【参考文献】

- 1) 佐々木直美：配偶子提供の意思決定に関連する心理要因についての検討－大学生を対象として－、山口県立大学学術情報、11、11-17、2018.
- 2) 才村眞理：子どもへのテリングのサポート方法に関する考察、帝塚山大学心理学部紀要、1、87-98、2012.
- 3) 福武公子：ドナーの匿名性と出自を知る権利、産科と婦人科、6、753-758、2002.
- 4) 久具宏司：配偶子提供－現況と課題、医学のあゆみ、249(1)、135-141、2014.
- 5) JISART、精子・卵子の提供による非配偶者間体外受精に関する JISART ガイドライン、改定平成 28 年 6 月 (2017 年 11 月 1 日検索)

<https://jisart.jp/jisart/wp-content/uploads/2017/06/c6ccdcc5033b81d2ec54cd899d552c66.pdf>

- 6) 久慈直昭・嶋田秀仁・長谷川瑛・伊東宏絵・井坂恵一、わが国における不妊治療の現状、小児科診療、78(1)、19-26、2015.
- 7) 伊藤弥生・蔵本武志・村上貴美子：配偶子提供生殖医療における課題－臨床心理学的視点からの検討、日本性科学会雑誌、30、45-50、2012.
- 8) K. クリップペンドルフ：三上俊治他訳、メッセージ分析の技法「内容分析」への招待、勁草書房、東京、1989.
- 9) 吉田和枝：AID によって生まれた児の福利に関する考察－看護学生への意識調査を参考にして－、母性衛生、46(4)、533-542、2006.
- 10) ジャネット・ジャフェ、マーサ7・O・ダイヤモンド、デービット・J・ダイヤモンド：高橋克彦・平山史朗(監修)、子守唄が唄いたくて、バベルプレス、東京、2007.
- 11) 富谷友枝・清水清美・森本義晴：卵子提供を受け母親になる過程での女性の体験、日本生殖看護学会誌、10(1)、33-41、2013.
- 12) 宇都宮隆史：非配偶者間生殖医療(提供精子人工授精：AID)の実態と今後の課題－AIDで生まれた方々の意識調査をもとにして－、日本授精着床学会雑誌、30(1)、146-159、2013.
- 13) 非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ会員：子どもの出自を知る権利について－AID(非配偶者間人工授精)で生まれた子どもの立場から－、学術の動向、46-52、2010.
- 14) 古澤頼雄・富田庸子・塚田・城みちる：非血縁家族において子どもが作る自分史への発達支援－育て親によるテリングに関する探索的検討－、中京大学心理学研究科・心理学部紀要、5(2)、23-33、2006.
- 15) 才村眞理：ソーシャルワークにおける子どもへのテリングに関する研究、帝塚山大学心理福祉学部紀要、2、27-38、2006.